

2. 高校2年

「国際理解・人権・平和」

「命^{ぬち}どう宝^{たから}— 沖縄の心から平和を学ぶ」

榎本直子・長谷川 弘
徳井輝雄

I. 学年テーマについて

総合人間科では「自分の人生を自覚的に選択する力」—人生のあり方、人生に対する態度を自分で探究し、自分の人生について主体的に考える力を育てることを目指している。生徒の自己実現の目標が既存の教科・科目の枠組みにとどまる限り、変貌する社会に対応し現代的課題を解決していくことはできない。また、人生の選択を単に大学・職業選択としてとらえるのではなく幅広く生き方を問うものとして考えると、その基盤となるのは社会認識であろう。これからの生涯学習の時代にふさわしい学力とは、既存の教科学力では測れない総合的な視野に立った問題意識を伴うものでなければならない。

総合人間科の教育課題として、生命、環境、平和、民族、開発など21世紀に向けた世界的・地球的規模の問題があげられている。1995年度の高校1年では、「生命と環境」を軸に「いのちネットワーク」と題して一人一人の問題意識の発見を重視した学習を行ってきた。1996年度は、「国際理解・人権・平和」をテーマにさらに社会認識を深める方向で追求していく。特に学校行事である沖縄研究旅行をその学習の場としてとらえ、総合学習的な見地から生徒の自主活動として実施する。「命どう宝」とは沖縄で古くから用いられる言葉であるが、前年度の「いのち」に続く学習としてサブテーマとした。長年実施されている沖縄平和学習であるが、より歴史的認識を深め国際関係に目を向けた総合科目として発展させたい。

II. 学習方法と指導体制について

個人学習力から集団学習力へ

「学び合い」をキーワードとして生徒主体のグループを中心として展開する。

自ら問題提起し考えていく姿勢を大切にしながら、一つの問題を複数の視点で検討し理論的に議論していく。(自分の考えを他者に伝える、他の意見にき

んと耳を傾ける。) その過程で、様々な価値観や考え方を理解し、自分の考えを築き深めていく。

具体的には生徒と教師のチームを編成し、その中の議論をもとにクラス・学年に発信していく形態とした。

①テーマ授業

1クラス6チーム編成(生徒6~7名+指導教官1名)

チーム・ティーチング

1チーム1テーマで30分の授業を実施

②研究グループ活動

1クラス5グループ(生徒8名+指導教官1名)

a) ディベート グループ対抗で実施

b) フィールドワーク

研究テーマと日程の決定、訪問先との折衝、研究発表

沖縄研究旅行の第3日目に実施

各グループの研究テーマのもとにタクシーでの分散行動

③研究係活動

旅行委員会を中心に5係(生徒15~30名+顧問教官1~2名)

(班長・事前学習・ディベート・しおり・渉外)

生徒グループによる自主的な生徒集団全体への指導

III. 第1年から第2年次へむけて

1. 前年度の同学年との比較検討

(1) 総合人間科で培う力

前年度の高校2年では、総合人間科で伸ばす力として、①生徒自ら調査・研究する力、②発表・討論する力、③まとめ・伝達する力の3点をあげている。今年度の高校2年は昨年度と異なり総合人間科2年目であり、1年間の個人研究の実践で問題発見や調査・研究のプロセスを経験した。情報収集やフィー

ルドワークの計画実践などの力はかなり培われ、学習方法の基盤は形成されつつある。従って、生徒自ら調査・研究する力よりも発表・討論する力、まとめ伝達する力により比重をおいた授業計画とした。

具体的には、昨年度は総合人間科の導入として教員によるチーム・ティーチングでテーマ学習（3回の講義形式）を行い調査研究の発端としていたが、今年度は、生徒がチームを組んでクラスの他の生徒達にむけて授業を実施する形態とした。指導教官とともにチーム内で議論し一つの授業計画を立てるという教材研究の過程で学び合い、さらにそれを他に伝えるという授業実践で発表する力、伝達する力の大切さや難しさを学ぶことを目指した。

また、昨年度試みられたディベートは、生徒の自己評価の結果を見ると、「多面的視野」「客観的判断力」「発表能力」「論理的思考」などを身につけることができたとしており、来年度も取り組むとよいと65%の生徒が解答している。一つの問題を複数の視点で検討し論理的に議論していくことを可能にし、総合人間科の学習方法としては意義が深いことから継続し今年度も実施することにした。

（2）沖縄研究旅行の位置づけ

総合人間科の大きな特徴として学習の方法の中心に「脱教室」一体験学習（フィールドワーク）を重視したことがあげられる。昨年度の高校2年も沖縄学習・フィールドワークを中心として生徒と社会の結びつきを深め、平和を学ぶ中から「人生を自覚的に選択できる力」を養っていくことを目標として取り組んでいる。沖縄は現代社会の様々な問題が縮図となって現われている地であり、沖縄から現代の日本や世界の問題を考えることにより、「平和と自分」「社会と自分」「世界と自分」が身近になり、そこから人生を深く考えることが可能である。「沖縄」という一つの軸を設定することで、国際理解、平和、人権、民族の問題のみならず、その背景となる歴史認識や文化や自然を愛する姿勢などの多様な問題を有機的につなげ、単なる知識の断片の習得ではなく生きた体系的な知識を得ることができる。また、教室での学習が、研究旅行で現地に出かけ自分の目と耳で確認し、足で歩くフィールドワークに収束するために学ぶ楽しさを実感できる。

今年度も、基本的には昨年度の実績をふまえ、沖縄学習とフィールドワークを一つの柱とし研究旅行を総合人間科の一貫として実施する。しかし、昨年のフィールドワークはグループテーマと個人テーマの二つを設定して行われたが、研究の深まりの点で多少無理があり、今年度は個人研究はすでに昨年の

経験があることからグループワークに焦点をしばった。また昨年度の反省点であった研究旅行の事前学習と総合人間科との違いをどのようにして出すかを考慮した。単なる旅行の事前学習に終わらせないためには、沖縄からより幅広い問題へ視野が広がること、自分自身の問題としてとらえられることが必要である。学年テーマの「国際理解・人権・平和」を全面的に、それを追求していくアプローチが沖縄であるという認識をもたせる工夫が求められる。そのためには例えば生徒によるテーマ授業では、沖縄研究旅行の事前学習にとらわれないことを明言した。

2. 継続と発展—新しい試み

（1）個人学習力から集団学習力へ

高校1年の総合人間科では、「学ぶことを学ぶ（自己学習力）」を目標として、自分の興味関心を探り、問題（研究テーマ）発見、研究の方法を身につけることを目指した個人研究を中心に展開された。指導教官制をとり、同じ指導教官のグループ内での発表や助言、討議などは随時行われたが、「個」に執着することでより主体的に取り組ませ、一人一人の多様な研究過程にそうことを心がけた。その結果、最後の自己評価では「自分でよく考え…」「自分の意見、考えを煮つめた」「自分で積極的に資料を集めた」「一人の力で計画した」「自分の方法で調べた」「自分の言葉で論文を書いた」…といった自己学習力に言及したプラス評価の表現が多くみられた。その一方で、一部には「個」にこだわり独自性を重視し過ぎるあまり、似たようなテーマの者とも共同研究を拒む傾向がみられたり、自分のテーマに関すること以外の物事に無関心であったり、研究成果を他者に伝えることには消極的な自己完結型の者も見られた。最終的には個人研究論文という形で周囲の人達へ研究成果を発表することで1年間の活動が終了し、残念ながら時間数の関係でその内容について全体でディスカッションする機会がもてなかった。そのためせっかく「生命と環境」を様々な視点からアプローチし、一人一人の研究には見るべきものが多かったのではあるが、目標としたそれらを有機的につないだネットワーク形成（昨年度のサブテーマ「いのちのネットワーク」）にまで至らず、次年度への課題として残った。

また、個人研究の場合当然のことながら個人差が大きく、指導教官からのアドバイスだけではなく生徒間の言葉や情報のやりとり、議論などの刺激の必要性を感じた。

今年度は昨年度の成果と反省をふまえ、個から集団での学びあいに発展させる。個人研究で培った問

題意識と調査研究の方法を生かし自分の考えを構築させるとともに、自分の意見を周囲にむけて発信し、他の考えに耳に傾け討議し理解を深めていくプロセスを経験させる。一つの問題を複数の視点で検討し論理的に議論することにより、問題の本質を知り、多角的な視野で物事を見つめ客観的に判断する力や、他者の立場や価値観、感情を理解する寛容さなど柔軟な行動を身につけさせる。一人の力が集団に及ぼす効果、集団の力が個に及ぼす効果の両方が学び合いから生じることが期待される。

(2) テーマの発展

学年テーマが「生命と環境」から「国際理解・人権・平和」となるが、両者に共通する視点は多い。昨年度の個人研究テーマのなかにも、今年度につながるもの（いじめ、命の重み、南北問題、福祉、環境破壊、エイズ、差別、朝鮮従軍慰安婦、国際比較、日本の行事など）も多く、それらをうまく取り込みながらより発展させる配慮をする。「生命と環境」で学んだ人間と社会の関わり、人間と自然との関わりが、時間的（歴史的）にそして空間的（地域から国、世界へ）により広がりを持った「国際理解・人権・平和」となる工夫が求められる。

(3) フィールドワークの場 —地域から沖縄に—

総合人間科の軸となるフィールドワーク先が地域から研究旅行で訪れる沖縄へと視野が広がる。昨年度は身近な地域で多様な訪問先（学校行事の野外学習では120人が一日で述べ96カ所訪問）で展開したが、今年度は同じ「沖縄」という地を同じ視点で（沖縄戦の南部戦跡—平和・人権・歴史、米軍基地—国際関係・人権・平和）で学ぶフィールドワークと、グループでの研究テーマにもとづくフィールドワークの2本立てとして発展させる。

IV. 指導の経過

(1) 1学期

テーマ授業 生徒と先生によるチーム・ティーチング

各クラス6グループ編成（生徒5～8人）とし、それぞれのグループに指導教官1人

（7名の指導教官はそれぞれ各クラス1グループ、計2～3グループを指導）

このチームでテーマ授業を生徒主体で展開
〈テーマ〉

人権（人権とは、部落差別、いじめ、男女差別、子どもの権利など）

国際理解（在日米軍基地について、沖縄の米軍基地問題、日米文化比較）

平和（沖縄戦の事実と背景、集団自決について、戦争中の皇民化教育）

民族（在日韓国朝鮮人差別問題、アイヌと和人と琉球）

文化（戦後日本社会の食生活の変化、ロックから探る若者文化）

産業（リゾート開発、空港—沖縄新石垣島空港と中部新国際空港）

自然（保護か開発か、絶滅生物—人と自然の関係、人間社会の未来）

女性（米兵の犯罪事件、米国三菱セクハラ事件）

1チーム・30分

総合人間科2回を使ってローテーション

生徒が生徒に問題提起をする形態は、生徒が積極的に授業に参加する上では勿論のこと、総合人間科の授業を創造していく上でも大いに効果があった。事前にクラスメートを対象にしたアンケート調査、交通局や沖縄県事務所などへ調査に行く、英文の資料を読むなどの多様な教材研究が見られた。これは昨年1年間の総合人間科の授業などで得られた特徴ある参加態度と思われる。また、チーム内でのディスカッションもチームによる格差はあるものかなり活発に行われた。今年度の目標である集団学習力（学び合い）の第一歩が踏み出せたように感じられた。

実際の授業では、ビデオや音楽を利用したり、実物の提示、クイズやディベートの形式で行ったりと楽しい試みがみられた。問題追求の甘さや研究発表と授業の違いがつかめないうままで終わった部分はあるが、自分達の実態を調査して、問題提起してこうとする姿勢が自然と身についた。既存の教科では活躍しにくい生徒が積極的な役割を果たした点が印象に残った。

第1回（4月20日）

オリエンテーション

学年テーマ「国際理解・人権・平和」

目標と方法について 「なぜ、沖縄か」

テーマ授業のテーマの提示

生徒発表（昨年度の研究から今年度のテーマに関連したものを）

4月22日 テーマ授業の希望調査

生徒の授業チーム編成、指導教官決定

↓

5月13日 チーム・指導教官発表

第2回（5月18日）

チーム・ティーチング準備

その1（指導教官によるグループ指導）

テーマ授業の意義と方法（指導教官から）

グループ討議 授業内容・資料の検討・役割分担

第3回（5月24日）

中間テスト最終日の特設

ティーム・ティーチング準備 その2

学習指導案の作成

第4回（6月1日）

生徒によるテーマ授業

（第1回）

各クラス3テーマ

（30分×3ティーム）

第5回（6月15日）

生徒によるテーマ授業

（第2回）

各クラス3テーマ

（30分×3ティーム）

第6回（6月29日）

沖縄研究旅行にむけて

全体説明；旅行の目的と研究方法、日程

（生徒旅行委員会主催）

各クラス；グループワークに向けて

グループ編成

研究テーマの検討

事前学習計画

第7回（7月6日）

教育学部特別講義（教育学部 植田先生）

研究旅行グループワークに向けて

“学び”を学ぶ”

7月11日 LTを利用 グループワークのテーマ決定

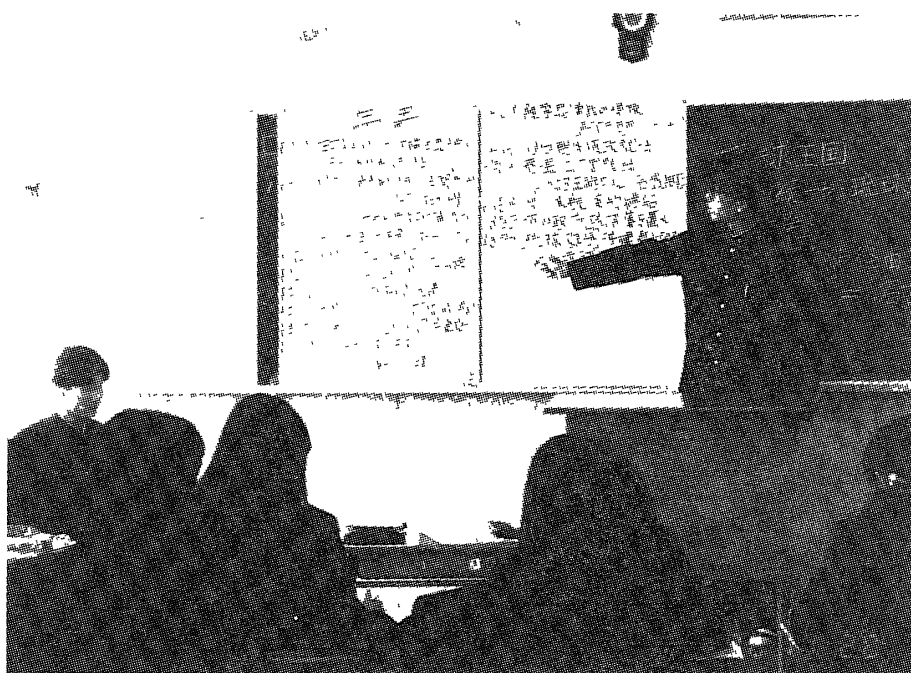
最終締切18日→旅行委員会で検討

（2）2学期

ディベートによる沖縄学習

昨年の2年生に引き続き沖縄研究旅行の事前学習の一貫としてディベートを計画した。2学期に入り学校祭が終了した時点から具体的な準備に入り、定期考査をはさんで総合人間科の授業2回を利用し計3回のディベート実施した。

昨年のディベートが「沖縄米軍基地は撤廃すべきである」というテーマで行われたのに対し、係の生徒の間から、前年と同じテーマでは少し物足りないという声が発せられ、「沖縄は独立すべきか否か」（必ず基地問題を入れて）というテーマで始めようとした。しかし、このテーマで始める直前になって「これでは具体性に乏しくやりにくい。できそうもない」という意見が多数出され、急遽、ディベート係で話し合いを持ち、以下のような条件をつけること



テーマ授業「平和」の一コマ

となった。

テーマ：「沖縄は独立すべきか否か」ただし次の条件のもとで

1. 日本から独立

（「独立」とは「他国の干渉を受けないもの」と定義する）

2. 利害関係のない第三者の視点から論ずるものとする

3. 軍事的に、経済的に

（9月30日ディベート委員会にて確認）

タイミング的には沖縄で種々の事件が起こり、基地問題に関心が集まり、沖縄に関する数々の出版物が書店に並び、この種のディベートを行うには絶好の時であった。ただ、旅行の際のフィールドワーク先探しとはほぼ同時期であり、あわただしい中で準備に十分な時間が取れなかった感がある。また、クラスで5つの班を作り、抽選によってそれぞれ肯定、否定、議長団、審判、審判の役割を当て、各班に少なくとも1回は肯定または否定側に立たせることにしたが、実施回数が3回であり、肯定・否定の両方の立場に立っての議論ができなかった。

実際に行ってみると、論議の範囲が多岐茫洋に渡り議論がかみ合わなかったり、「紳士淑女の知的ゲーム」のはずがルールを逸脱してしまい感情的に気まぐずい状況も出現した。しかし、総じてほぼ全員が真面目に取り組み、限られた時間の中でベストを尽くしていた。生徒全員に持たせたディベートノートや、審判になった生徒の評定表も予想以上にきちんと書

〈資料1〉ディベートノート例

ディベートノート
＜C組 第2回＞

	肯定側	否定側
班	4班 大野未貴 小柳了智 加藤雄二 伊田麻野 赤田夫智 鈴木陽子 橋本潤一 吉田元好	1班 柴田裕彦 高山百葉 谷口 匠 高水一正 平田 薫 堀 久美 三橋陽子 渡邊 崇
立論	沖縄の米軍基地と日本の自衛隊基地が独立によりなくなれば日本人の土地をまたず米軍の犯罪がなくなる 沖縄周辺の200万海里の海が自由に使える — 自然保護にもつながる 沖縄独自の自由貿易が可能になる 沖縄は自由になれる	独立と基地問題は切り離して考えるべき (独立しなくても基地撤廃は可能) 経済的に基地に依存 独立後の経済基盤が脆弱 資本を他に頼るしかなく深刻な危機 天候や交通網に問題があり リゾート地としてやっていけるか? ノンリゾート地と比較できない過去がある 沖縄の独立は国際的に不安からせる
質疑	肯定側の応答 堅かたくさいるのでフカしとかアスファルトの土は、アスファルトを撤去 沖縄政府が出してくれればいい 沖縄は平和を好むので 争論は必要ない 国際世論も何となくしてくれ	否定側の質問 面を強めて開発が促進する根拠は? アスファルトで固められた基地の跡地をどう農地化していくのか? アスファルト撤去の費用はどうするのか? 軍事力なくして他国からの侵略にどうのように対応するのか? 自衛隊が必要になるのではないのか?
応答	肯定側の質問 基地問題と独立はどうして切り離せるのか? リゾート化できないといつか 実際にリゾート化されているではないか 台風は季節的なもので関係ないのでは?	否定側の応答 日本女保第10条では日本どちらか希望すれば基地撤去できる 現在は日本政府の援助があるので成立 日本の援助がなくても経済的自立は無理 リゾートだけで経済を成立させようとするのは無理 沖縄の観光は海などの野外活動が主)
最終	現在女保によって沖縄は日本の米軍基地の75%が存続。独立すればこれが撤廃できる。 沖縄の環境破壊が少なくなると自然が守れる 中継基地などで経済を向上していけば 自立は可能 今の沖縄の人の意識がもたらさない状況より多少困難であっても強者の力がい	肯定側の論は現実的でない 質疑応答もきちんときれなかった 女保が撤廃されるとアメリカとの関係が悪化 沖縄には、日本の一員として アメリカと日本の保護し役として期待 これからの日本を動かしていくのは私たち 沖縄の独立しなくても基地撤廃は可能 沖縄を通じてアジアとの関係を探めていく

ディベートノート
＜C組 第3回＞

	肯定側	否定側
班	3班 浅井尚美 安達順一 河合 修 野田田彦 服部洋一 原 優子 村松未帆 若松 佳	5班 鈴木久貴 陳尾健一 野村佳史 浅井甲秀 黒川三治 小崎裕美 及川 豊 浜ひかり
立論	政治的に見ると 日本政府は沖縄県民の意思を反映していない (基地縮小や女保地位改正の問題) 政府と沖縄の意見のずれ 経済的にみると 基地経済で沖縄が成り立っているのは誤り 基地が経済活動を阻止している 本土からの資本では沖縄経済の発展はない 外交的には 独自のアジア版のプランがある 侵略国日本とは異なる外交の可能性	独立しても基地撤廃は難しい 沖縄県民の意思統一はされていない (県民投票の棄権率) 様々な立場の人が存在 経済的に自立できるのか 観光だけでは自立の条件は成り立たない (雇用問題、中小のホテルなどは経営不振)
質疑	肯定側の応答 発展途上国でない沖縄はフ リビニ以上に 基地返還後の利用が大きい丈夫 土地を企業に貸しその収入が返戻されるし 利用も保障される 本土からのホテルは必要ない 沖縄県だけで作れる	否定側の質問 フリビニと同じように沖縄はなれるのか? 基地関係で働いている土地の人はどうなるか ホテルなど施設ばかりでなく暮らせるのか
応答	肯定側の質問 県民投票を棄権した人が 基地撤廃にしがたがっていつという根拠は? 本土の企業か土地を買っていることを どう考えるか?	否定側の応答 基地のある市町村ほど 県民投票の投票率が低い 沖縄が買い占めるのに 本土は負担はできない
最終	沖縄県民の意思を反映しない日本政府から 独立し独自の外交を行う 日本女保を破壊し、事態の打開と平和な沖縄に アジアの侵略国でない沖縄には 各団からの支援が期待できる 日本やアメリカも保障金をはらい 経済的自立を支援すべき	独立したあと経済的にやっていけない。 本土から独立するのはなく 本土も協力してやっていくべき (本土も女保の負担はみんなて負うべき) 沖縄の歴史をこれからの日本の行政に 生かす努力をこれからはすべき

〈資料2〉ディベート原稿例

肯定側立論

例、＜C組3班＞

私たちは、今沖縄のおかれている現状を知るべきです。表向きに言葉に感傷されたいように、一つ一つの事柄において、その目的は何なのかを明らかにしておく必要があります。沖縄には明らかにされていない事柄が数多く潜んでいます。世界レベルのことで容易には解決できないことも多いでしょうか、目的をはっきりさせることは、沖縄の県民だけでなく、沖縄の現状を少しでも知った我々も強く望んでいることです。

私たちは沖縄の独立について、政治、経済、外交の3つを基盤とし、日本政府の沖縄に対する無責任、かつ無関心な態度や日本と米軍の関係に注目して話を進めていきたいと思えます。

まず、政治的な面では、現在の日本政府は沖縄県民の意思を反映していないと思えます。プリントの先日の衆議院選挙の際の各政党の公約一覧表を見て下さい。共産党と新社会党以外の政党はすべて日本女保体制を堅持することを主張しています。今回の選挙で勝利したのは自民党です、ということは本土の国民は日本女保体制堅持に賛成ということになります。日本政府は地位協定の見直しすら主張していません。外務省と防衛庁による政府広報も、「沖縄の問題は日本の問題」といながら、米軍基地は日本女保体制を支える基盤として必要不可欠なものだと語っています。しかしそれに対して、沖縄の自民党県連は、女保を見直して根本的な基地問題解決を求めています。

このことから本土と沖縄県には大きな感覚のずれがあると言えるのです。したがって、このようなずれがもたらしているのは基地問題の解決は期待できないのです。

次に、経済的な面では、今沖縄は政府からの地方予算に頼っている部分が多くあります。しかし、それが独立することによって断ち切られたらとて、全くやっていけないことはありません。

沖縄経済の多くを担っているとされる観光収入を見てみると、今沖縄にあるリゾートホテルのほとんどは本土の企業のもので、沖縄の利益にはなっていません。しかし、独立すれば、その利益は沖縄のものとなります。

また、基地経済で沖縄が成り立っているという見方がありますが、それは誤りです。逆に基地が沖縄の経済活動を大きく阻害しているのです。重要な土地が基地として使われ、有効に利用できないのです。土地が返還されれば、様々な活性化が望まれ、問題になっている失業率も低くなること期待されるし、地主も企業に土地を貸せばちゃんとした収入があるはずなのです。また、政府は経済的に不可能とも言いますが、実際同じような経済状況で独立を維持している国があります。ノンリゾート地ですが、フィリピンにはかつて米軍基地がありました。いまではこの基地が撤去されて大きく経済的に発展しようとしていきました。ですから、沖縄の経済的自立は充分可能だと思うのです。

最後に、外交的な面では、軍事的に不安であるとの声もありますが、いまだに侵略国の脅威を引きずっている日本とは異なる平和的な外交が期待できるのではないのでしょうか。沖縄では、すでに2015年までに3段階で基地返還を行うアクションプログラム「国際都市構想」が作られています。この構想では日本と対峙的な沖縄の歴史をふまえた独自のアジア交流を行うとしています。「沖縄目」ならば、日本以上に実りある友好的な外交関係が形成されるのではないのでしょうか。

このような3つの視角からみて、私たちは沖縄は独立すべきであると主張します。

否定側立論

例、＜B組5班＞

沖縄が独立するという事は、まず、第一に軍事面において様々な問題があります。先日の県民投票を取り上げて説明したいと思います。

沖縄の県民投票の結果は、基地縮小をよめる割合の方が高かったのですが、実際の投票率は6割に届きませんでした。投票しなかった残りの人たちのうち反対した人たちの本意は「基地がある事は嫌だ」と感じているでしょう。しかし、この人達は基地に依存して生きる事をしられてきた人々です。この投票の結果はこうした人たちの「ためらい」が反映され、基地に頼って生活してきた人々の不安が表面化されていると思います。現在では基地の存在は過去半世紀の間に構造化し、沖縄の人々の生活と切っても切り離せない関係にあります。6割に届かなかった投票率は基地経済に組み込まれた沖縄の複雑な事情を映し出していると思います。現実には30%以上、この島々に基地はあり、基地を巡る職場もあったのです。それらの人々すべてを合わせて半民なのです。都会の選挙と違って、棄権はそのまま無関心ではありません。表面の結果だけを重視するのではなく、このような面も軽視してはいけません。

また、沖縄は青天開飛行場などを移転しようとする基地縮小を訴えています、それはかなり難しい問題です。実際は嘉手納飛行場などがある沖縄市の投票率は54%、キャンプハンセン等を抱える金武町では51%と基地の町では投票率が伸び悩み、反対票が10%台後半から20%を超えたところもありました。もし、これらの基地が沖縄からなくなれば、沖縄の人たちはたいへん困ってしまうでしょう。

次に産業の面について考えていきたいと思います。現在沖縄には1年中たくさんの観光客が訪れています。その数も年々順調に増加しています。しかし、航空会社、大手旅行会社系列のホテルは、パック旅行などの観光客を確保して高い利益率を維持しているのに対し、小規模施設は客を集める力がありません。最近では、レジャー施設を備えた海浜、リゾート型ホテルに人気があったり、ゴルフ客を受け入れ、冬場の高い利益率を維持しているリゾート型ホテルもあります。もし、沖縄が独立すれば、沖縄だけで今までの利益率を維持していきませんか。

現実には那覇市内の中小ホテルの多くは経営不振に陥っています。航空路線も風化され、1989年現在では国際線5路線、国内線17路線、県内線13路線となりましたが、もし本土が沖縄にとって他国となれば、17路線もある国内線は減らされてしまうでしょう。現在本土からは日本航空、全日空、日本エアシステムが乗り入れています。拡大する航空路線とともに観光客は増えているのです。また、多くの島々で成り立っている沖縄では、飛行機はいわばなくてはならない県民の足で、それをすべて沖縄が負担するというのはとても困難であると思われまます。

沖縄経済にとって観光は大切な要素です。しかし、あまり信頼できそうにない観光収入の大きさに目を奪われるのではなく、例えば地域の産業とどう結び付けられるか、観光客をこれからも増やすにはどうしなければならないか等という事を真剣に取り組む事が大切だと思います。また、不況になれば観光客は落ち込んでしまうし、自然環境の荒廃が進めばそっぽを向かれてしまいます。びくびくの厳しい性格を持っている産業だけに、沖縄県民だけが解決することのできない重要な問題だと思います。

このような考えから、私たちは沖縄は独立すべきでないと主張します。

かれていた。

このディベート学習のねらいはディベートそのものよりも、それを行うことによって沖縄学習についての糸口を見つけることにあったが、ディベート後の自己評価を見ると、確かに学習の前と後では、理解度・関心度は深まっていると言える。また、準備をする段階での作業を通じて、沖縄でフィールドワークを行う際に中心となる各班のチームワークも醸成されたように思われる。

問題点としては各班の取り組みの度合いの差が出たこと、肯定側にやや不利なテーマであったことがあげられる。テーマの決定に教員の側からも働きかけて、生徒の取り組み易いものにすべきであった。

沖縄研究旅行 現地でのフィールドワーク

昨年1年での個人でのフィールドワークからグループワークに発展させる。一つのテーマを複数の眼で検討し、協力して実施していく中で、集団の中での自分の位置を認識をし、仲間に対する見方も学ぶことを目指した。

沖縄研究旅行では全員共通の行程（沖縄戦跡、米軍基地）は平和学習を全面に研究系の単位で準備をした。グループワークはもっと幅広く生徒の自主性に任せて研究テーマを考えさせた。訪問先の検討や折衝など事務的な作業は今年のフィールドワークの経験が生き、あまり教員の手を煩わすことなく行われた。しかし、グループ内の意思統一に手間取ったり、特定の生徒に任せてしまうグループもあり、集団で活動することの困難さを感じた者もいた。（研究テーマと訪問先は次ページを参照）

第8回（9月7日）

研究グループ活動
グループワーク計画
研究テーマ・訪問先・行程
係分担決定
事前学習計画

第9回（9月21日）

ディベート準備
ディベートとは？
討論の方法など（係生徒からの指導）
グループでの役割分担と
事前学習計画

第10回（10月5日）

ディベート準備 その2

第1回 ディベート

「沖縄は独立すべきである、是か否か」

第11回（11月2日）

第2回 ディベート

第3回 ディベート

研究グループ対抗

（ローテーションで3回実施）

11月12日～15日

沖縄研究旅行（第3日、グループワーク）

第12回（11月16日）

研究旅行事後指導

グループワークの訪問先へのお礼状

フィールドノートの完成

第13回（11月21日）

研究旅行

グループワークのまとめ

発表準備

第14回（11月28日）

研究旅行

グループワーク発表会



グループワーク発表会の風景

〈各クラス・班別テーマ発表一覧〉

A組

- 1班 沖縄の人々の心を求めて
県立博物館・沖縄出版・幸地腹門中墓
- 2班 米軍基地を訪ねて
異文化交流センター・米軍基地
- 3班 沖縄の自然
沖縄子供の国・東南植物楽園・琉球村
- 4班 リゾート — 海洋汚染の実態は？
沖縄大学・公設市場散策
- 5班 沖縄の伝統家屋
琉球大学・読谷民族資料館・琉球村

B組

- 1班 沖縄の宝物
～ヌチドタカラとニライカナイ～
直木賞作家／大城立裕氏・斉場御嶽
- 2班 沖縄の人の意識
～昔から受け継がれてきたもの～
県立泊高校・普天間宮
壺屋陶器組合／やちむん家
- 3班 沖縄の海と自然
知念海洋レジャーセンター・
東南植物園・いんぶビーチ
- 4班 米軍基地のメリット・デメリット
異文化交流センター・米軍基地
- 5班 米軍基地について
異文化交流センター・米軍基地

C組

- 1班 琉球王国
～三国統一から琉球処分～
県立博物館・首里城公園・
スタジオパーク琉球の風
- 2班 アメリカ発 ⇨ 沖縄経由 ⇨ 名古屋発
国際通り探索・名桜大学・喜納昌吉インタビュー
- 3班 自然がまぶしい 輝く島を汚すもの
県環境保健部・沖縄自然観察
- 4班 ハブを通して沖縄の人の生活をさぐる
ハブ研究所・玉泉洞文化村・万国百貨店
- 5班 沖縄の伝統工芸
沖縄工芸村・読谷村花織組合・座喜味城

(3) 3学期

研究集録の作成

本校では研究旅行のまとめとしての研究集録が、これまで毎年作成されてきた。本年度はこの研究集録を研究旅行だけの内容にするのではなく、一年間の総合人間科の授業の集大成と考え、1学期のテ

マ授業のまとめや2学期のディベートなども含めた構成を考え編集した。

また、この授業が教師と生徒のティーム・ティーチングを目指していることから生徒を組織的に活動させることを心がけた。研究旅行の際の係・グループが中心となって原稿を担当し、全体を旅行委員会から受け継いだ編集委員による運営とした。編集会議では生徒側から新しい提案がされたり、総合人間科の授業内容や取り組み姿勢に対する生徒間の評価も聞かれ、今後総合人間科の年間カリキュラムの作成に生徒が参加することも期待できると感じた。

研究集録の内容

- | | |
|------|---|
| はじめに | 学年テーマ「命どう宝」について
1年間の歩み (活動方針、年間計画) |
| 第1章 | 「国際理解・人権・平和」を求めて テーマ授業
授業内容紹介 (学習指導案と授業プリント)
授業を終えて (感想、自己評価、相互評価の記録) |
| 第2章 | ディベートから学ぶ
授業の様子
ディベート・ノート
肯定側否定側の立論と最終弁論例
アンケート結果 |
| 第3章 | 研究旅行 沖縄から学ぶ |
| 第1部 | 平和宣言文 (旅行委員会)
平和メッセージ (全員)
沖縄戦の跡をたどって
基地の中の沖縄 |
| 第2部 | グループワーク |
| 第3部 | 旅行を終えて |
| おわりに | 指導教官のコメント |

第15回 (12月7日)

研究集録に向けて
内容の検討
研究旅行のグループワーク報告の構想
研究旅行関係の原稿提出 1月末まで

第16回 (2月1日)

研究集録の作成
1学期のテーマ授業のまとめ
2学期のディベートノートの点検
平和メッセージの整理

第17回 (2月15日)

総合人間科一年間の評価（自己評価、相互評価）

第18回（3月15日）

講演会「国際理解・人権・平和を考える」

ユネスコの寺子屋運動から PTA安達さん（スクールボランティア）他

V. 生徒の取り組みと変容

1 生徒による授業

(1) 1学期は生徒による授業が中心になった。主に沖縄にからめテーマを「人権」「国際理解」「平和」「民族」「女性」「自然」「文化」「産業」に分け、アンケートを取り各生徒がそれぞれのテーマに割り振られた。

生徒はテーマごとにグループを作り、分担し、発表方法を決め、図書館等で調べたりした。

テーマを決める時に「人権」「国際理解」「平和」は必ず各クラス1グループを作ることにしたが、このテーマが一番生徒に人気なかった。それで無理やり割り振ったので、このテーマに割り振られたグループはその後の活動にあまり積極が見られないといった傾向があった。生徒の学びたい学習分野と教師側の要求とがずれたときの一つの問題点であろう。

発表はビデオやOHPを使ったり、クイズ形式にしたりと各グループとも工夫をしていた。

(2) 生徒の自己評価を少し以下に抜き出してみたい。

- ・ 時間が余ってしまった。全体を通してのリハーサルをやるべきだった。授業って難しい。勉強になった。
- ・ 周りの人に「いい発表だったね」って言われてうれしかった。H君の司会がとても良かったんじゃないかな。わたし自身は発表しなかったけど他の人の発表もよかったし、明るい雰囲気できて良かった。
- ・ すごく準備に時間を費やしたと思う。授業では思うように進めていけなかった。終わってから「あれもこれも言いたかったのに…」とたくさん後悔した。やっぱり人に伝えることって難しい。今回の授業はやってすごく自分にプラスになったと思う。

2 ディベート活動

(1) 2学期はディベートが中心になった。グループは研究旅行の班がそのまま行った。

テーマは「沖縄独立は是か否か」で、3時間（3

回）行った。テーマはディベート係が決めたが、難航した。係の生徒は昨年の「米軍基地は撤廃すべきか」のテーマとは違ったものをやりたがり、このテーマになったのだが、他の生徒からは「難しい」と不満がでた。生徒には教員側から、ディベートのねらいは、ディベートを行う事よりもディベートを通して沖縄を学ぶことにある、と説明しこのテーマで行うことになったが、やりだしてみると生徒は楽しんでいたようだ。

(2) アンケートから

ディベート後アンケートを行った。教師側のディベートのねらいは沖縄基地問題の学習にあった。その点のアンケート結果を以下にまとめる。

① 沖縄の現状や抱えている問題にたいする意識

	低				高	平均
	1	2	3	4	5	
ディベート前	18	37	44	10	5	2.54
ディベート後	9	6	29	48	22	3.60

② 沖縄の基地問題にたいする理解度

	低				高	平均
	1	2	3	4	5	
ディベート前	28	43	32	10	1	2.24
ディベート後	5	12	28	54	15	3.54

ここからも分かるようにディベート前と後では生徒の意識・理解度は大分変わる。ディベートの学習効果は高いといえよう。

(3) ディベートの生徒感想を以下に抜き出してみたい。

- ・ 最初はどんなふうになるかなって不安に思っただけど、すごく楽しかった。人それぞれの個性が出ておもしろかった。
- ・ 最初は絶対にやりたくなかったけど、いろいろ調べているうちに結構おもしろいと思った。今度もしやるのなら、もっと私たちの身近の問題がいい。
- ・ 「討論」という形式にそってやるのは初めてだったのでとても楽しかった。自分の経験になったしこれから先またこういうことがあってもやっていけるし、やりたいと思う。ただし次のような感想も多かった。
- ・ ディベートというのは、理論的すぎて人間味がない部分がある。そんなに物事は定期的に進まないと思う。
- ・ ディベートは思わず白熱して感情的になってしまった。

- ・ みんなが怖くなりすぎ。今まで仲良しだったのに。
- ・ 私は直接争うということは嫌い。大変後味が悪い。

これは主に女子の意見だったが、方法論としてのディベートの根本的な問題を含んでいると思われる。

3 一年間の授業の自己評価から

同じ経験も人によってとらえ方はさまざまである。今年度は「学び合い」を念頭にグループ活動を中心に進めてきたが、お互いに知的刺激を与えられる人間関係はどれくらい築けたであろうか。一年の最後に行った自己評価文からグループ研究についてふれたものを紹介する。

- ・ 1学期から研究旅行に向けていろんな人と話し合いながらできたことがよかった。
- ・ 頑張れば頑張っただけの成果が得られると思う。(でもグループ等で活動するときは、みんなが同じ目標を持っていないと難しい。みんなの態度は、“協力”なのか“妥協”しているだけなのか、理解に苦しんだ。)
- ・ 生徒の自主性は評価に値するが何もしなかった人がいることもまあ事実。沖縄を意識したのが一定期間に過ぎなかったのは残念。
- ・ 個人で調べるよりも人とやる方がずっと難しかった。この授業があつてから新聞を読むようになった。
- ・ テーマ授業もグループ研究も自分では結構満足している。ディベートは自分なりの考えをもっと持てればよかったと思う。また、ディベートは事前にもっと研究してとても大切なものだと思った。
- ・ グループで学ぶことの難しさを知った。昨年、個人で研究している時は、グループで分担した方がやり易いのはと思っていたけどグループの方が難しいんだということを知った。でも、一つのことに対するものの見方が人によって違うので、個人で学んでいる時より、人の意見を聞くことができてよい刺激になったと思うし、面白かった。
- ・ 混乱が多かったように感じるがその中からはマニュアル通りのものからは得られないも

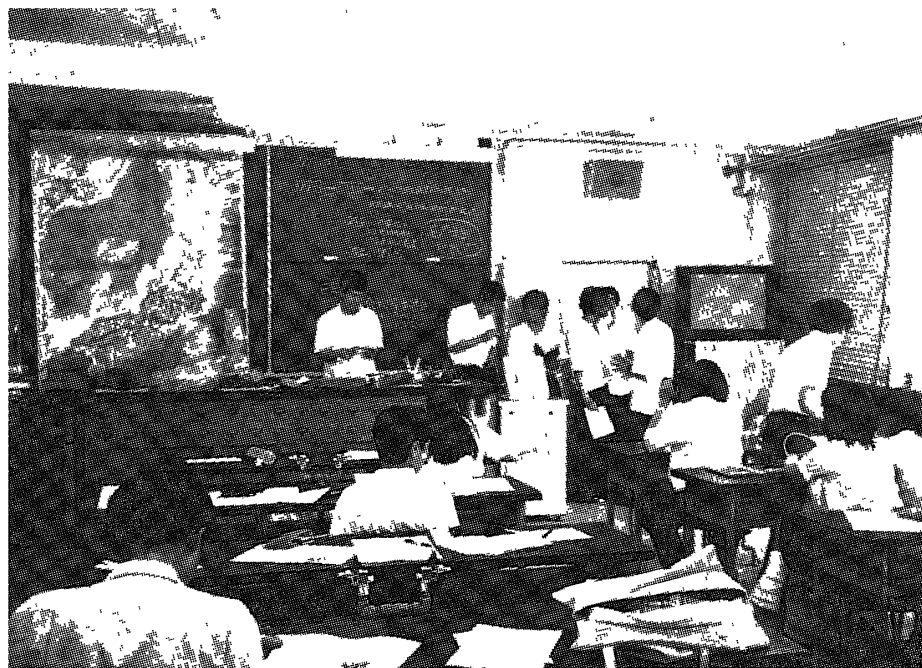
のがあったでしょう。

- ・ 学校に残って調べたり話し合ってみんなの意見が違ったりして、嫌だなんて思ったことが何回もあったけど、苦勞したり悩んだりしたことで充実感みたいなものを得た気がする。自分の中でもいろいろ考えられるようになったと思う。
- ・ 最初は自分がやらなくても他の誰かがやってくれると思ってやらなかったが、他人に任せきりではなく、自分でもやっていかなければならないということを知った。
- ・ 論文はうまく書けたと思うが、少し差別的な表現をしたのではないかと思う。そういう考えはやはり国境や文化の差などからくるものであり、ほんの小さなことでも、自分と異なるものを理解するのは難しいものだろう。この授業はそのような点で自分と世の中の対立や世界と日本、人間のあり方など考えるためのよいものだったと思う。

4 生徒の変容の一つの事例

ここにH君という生徒がいる。入学してきたときから学力は低い。ただし行事などには積極的に参加する。最初は学年を引っ張ってくれるのではないかと期待したが、やはり学力不足のためか、特に女子から軽く見られ学年では今一つリーダーにはなれきれない。

だが、その積極さのせいか、「総合人間科」では活躍が目立つようになった。本人も「総合人間科は好きだ」と言っている。例えば「生徒による授業」では司会をし、他の生徒を当てたり楽しい授業を行っ



生徒の活動状況

た。彼が言うには「いろいろ調べたり研究は他の班員がやってくれる。そのかわりに司会とかは自分も好きだしみんなも俺にやれと言ってくれるからやった。」とのこと。要するに彼は根気よく調査・研究するのは苦手ではあるのだが、そのかわり司会等の能力があり、他の生徒もそれを認めているわけだ。この能力をも一つの「学力」として認めてはいけないのかどうなのか。さらに調査、司会と得意分野に生徒は学習課題を分担するわけだが、そこから次の課題へ、生徒をどう激励し導いていったらよいのだろうか。ここに教師側の課題があるかもしれない。

彼が「総合人間科」を好きな理由は「(将来)役に立つ」と思っているからだ。「数学や古典を勉強しても役に立つとは思えないけど、総合人間科はちがう」とのこと。その是非はともかく、「総合人間科」という授業では彼は本当に生き生きとしていることは確かかなようだ。

VI. 評価について

1 学習の目標と学習の方法

評価の前提となる学習の目標と学習の方法について再確認しておく。

高校2年生の総合人間科における学習目標は次のようなものである。

国際理解と平和に関連した課題を見つける。その課題に付いて、集団での学び合いを通じ、多面的、論理的に自分の考えを深め築いていく……この様な学習力（自己学習力）の獲得を目指す。

その学習方法は次の如くであった。

1 学期

次のような分野のテーマ群から興味関心のあるテーマを選び、同じ様なテーマを選んだ生徒でチームをつくる。このチームに顧問教師を加える。各チームがテーマの持つ意義や課題等について調べ、その内容をチーム・ティーチング方式でクラスメートに問題提起する。

テーマ群 人権 国際理解 平和 教育 民族産業 自然 女性

2 学期

沖縄研究旅行にむけて、学習グループを作る。各グループは一学期に学んだ事を参考にして沖縄を対象にした研究テーマを設定する。そのテーマに基づいて事前学習、現地調査、事後学習をグループで行う。事前学習は、「沖縄は独立すべきか」というテーマの下で肯定側・否定側に分かれてディベート方式で行った。また、「皇民化教育」「集団自決」等沖縄戦に関連した事柄を、旅行委員が中心になって学習した。

2 評価の観点とそれにもとづく評価の方法

学年が揚げた学習目標の達成度をみる為に次のような観点を列挙する。

課題設定する力

与えられたテーマにふさわしい課題を設定できるか

調査する力

多面的情報の収集とその選択ができるか
グループ学習への適応力

指導性、協力性等があるか

総合的思考力

集めた情報に基づいて、自分達の考えを構築できたか

ユニークな観点が見られるか

発表する力

自分達の考えを他者に分かりやすく伝えることができるか

評価する力

他者や自己を評価する確かな観点をもち、それにもとづいて評価出来るか

上のような評価の観点は、全校的に考えらえた評価の観点とはほぼ重なる。実際にどのようにするかを例で示す。

	高 2 で の 評 価 観 点 例
I 知的関心の形成と 問題解決能力	<p>課題を設定し探究していく能力 テーマに即した課題設定ができたか。 (沖縄研究旅行、チームティーチング、ディベート) G</p> <p>必要な情報の多面的収集と選択の能力 ディベートの立論へ向けた情報・資料の収集の妥当性、 チームティーチングの資料作りや沖縄での訪問先選定 等の妥当性をみる。 G</p>
II 体験・コミュニケーション能力	<p>積極的な対話力 沖縄の訪問先で出会った人達との積極的対話が出来たかをみる。ディベートでの活躍の度合でみる。 G</p> <p>グループ学習への適応力 学習グループ内での役割を積極的に果たしたか。 (チームティーチング、ディベート、沖縄旅行) P</p> <p>体験学習への積極性 沖縄旅行のフィールドノートの活用程度でみる。 P</p>
III 創造的表現能力	<p>発表能力 ユニークな観点がみられたか、分かりやすい発表が出来たか等を、ディベートでの発言や、沖縄旅行報告書会や、チームティーチング授業での内容等でみる。 G,P</p>
IV 総合的思考力	<p>まなんだ事を実際に働かせる力 自己の進路選択に生かすことが出来るかをみる。 沖縄研究旅行グループワークの報告書の出来ばえをみる。 G,P</p> <p>評価する力 自己の他者を評価する観点を自ら作る力や批判力を、ディベート、チームティーチング、沖縄旅行報告会での自他を評価する観点が妥当であるか否かでみる。 P</p>

注： P……個人評価 G……グループ評価

なお、この表では評価主体は教師という前提であるが、IVの評価する力を除いて、生徒同士、生徒自身にも適用できる。

今後の課題

1 評価対象と評価の主体者 および評定との関係

評価対象について

グループ学習のためグループとしての評価と其中での個人の評価という二面性があり此の扱いが課題である。当学年担任団は、この二面性を反映した評価方法を採用するため具体的な方法を検討した。

評価の主体者について

学年では、教師、生徒同士、生徒自身の3段階で行うとしているが、これらをどう総合するかが課題であった。

評価と評定

従来の教科指導では、評価の生徒への還元は、評定表（成績票）を通じてなされている。これにならう面とさらに短いコメントをつける等の工夫された新しい面が要求される。その場合、前述の評価の観点に用いられた文言を使うのも良い。

現行の評定は最終的に個人を対象にしている。したがって、チームとしての評価を個人の評定に加算することが考えられた。

以上が評価に関連して問題にされた課題である。これらの問題は、総合人間科だけに限らずいずれの

教科についても考えなくてはならない事柄である。

2 カリキュラム作りへの生徒の参加

総合人間科の内容が生徒にとって意義有るものにするには、教師が生徒の立場に立っているいろいろ考察していくことが必要である。しかしこれだけでは、教師が生徒の立場に立つとはいえず、生徒にとっては、授業計画作成への間接参加であることは変わらない。教師の作った路線の上を走るだけでは、どうしてもやらされているという受身の態度の生徒が現われやすい。これを少しでも防ぐために、授業計画作成への生徒の直接参加は、高校生の場合、能力的に可能である。

本校の高校2年生の場合は、生徒にも一年生での総合人間科の経験があるので、4月当初から生徒の代表と共に授業の計画を作り上げて行くことは比較的容易であろう。

総合人間科が教師からみて「意義有るもの」「必要なもの」と考えられるものでも生徒の立場では息が詰まる様な堅苦しいものになっていては受け入れられにくい。生徒のカリキュラム作りへの参加は、総合人間科の授業を生徒にとって楽しいものでも在るようにする教育的保障である。沖縄研究旅行委員会への活躍はその大きな第一歩である。総合人間科委員会への発展が期待される。



研究旅行ー小雨の中熱心にメモを取る生徒達